三河本苑だより

５月号
2022.5. No.480
（発行者）
大本三河本苑
〒443-0031
蒲郡市竹島町２８-５
TEL 0533-69-7518
FAX 0533-69-1455

神の家日記　神の家進捗状況

神の家建設委員会
河　合　恭　久

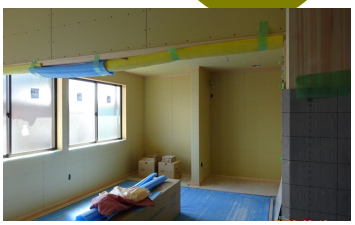
外装
4月2日撮影

神饌室・物置

神床・神殿

貴賓室

内装
4月2日撮影


青少年部室・祭員室

お茶室

廊下・ロビー

台　所

事務所

お知らせ

直心会の研修会のご案内（予定）

【日時】令和４年６月２６日（日）
【集合】亀岡天恩郷
●出雲大神宮を巡る。午後から正食の講話
・会費／三千円　・十五時終了予定

直心会

祭式講習を受講して

碧南分所　蒲生真矢

三月五日・六日に三河本苑で行われた祭式講習を受講させていただきました。普段の月次祭ではあまり意識せずに見ていた所作ですが、実際に自分で動作してみると多くの決まりがあって驚きました。特に、「上座・下座の位置が正中の位置によって変化する」という点が非常に複雑で、体に馴染

５月の行事
●７日（土）
直心会緑寿館献労
●15日（日）
本苑春季大祭・祖霊慰霊大祭
・奉納冠省句

６月の行事
●19日（日）
本苑六月月次祭
●26日（日）
直心会研修会（予定）

三河本苑公式NILE
↑コチラから
本苑だより更新中

むのに時間がかかりました。しかし、それだけ複雑で多くの決まりがある分、祭式には大切な意義が込められているのだと感じます。普段の月次祭を見る視点が変わったような気がしました。

私は八雲琴を習わせていただいており、以前から八雲琴の先生に祭式講習の受講を勧められておりました。

講習風景

しかし、近年のコロナ禍で大本本部に行きづらい状況が続き、なかなか受講することが叶わないでいました。その時に父から三河本苑で祭式講習が行われると聞き、「チャンスだ！」と思い、受講させていただきました。

講習では祓式行事と正中動作を中心に、一つ一つの動作に込められた意味も教えてくださり、祭式について何一つ知識のない私でも理解しやすい丁寧なご指導でした。今回 学んだ祭式を、月次祭や日々の朝拝・夕拝に活かしていきたいと思います。

「分所・支部長研修会」開催のご報告

宣教部長　生田吉亮

令和４年度「分所・支部長研修会」を去る３月２７日に本苑にて、皆様のご協力により開催させていただきました。

午前中は本苑長を講師として今年度の「教団方針」の内容を解説していただき、午後からは２つのグループに分かれて教団方針の中の活動内容などを検討する話し合いの場を設け、その内容を発表する構成で行いました。

参加者の皆さん

本苑長による講話

本苑長の解説講話は「教団方針」と追冊されている「教主さまごあいさつ」も含め、良く研鑽され図解を交えての説明でした。教団方針は教主さまの思い、願いが込められており、これに応えるために「私たちの６つの誓い」からのキーワードをもとに個々、機関からできる事の活動を始める意識を持つよう激励されました。毎年配布される教団方針も改めて、しっかり目を通す時間になりました。

午後からのグループ別検討会では、教団・人類愛善会の方針に応えようにも…。個人として既に実践できている行いはあるものの、各家、各機関の内では先が見通せていない現状を改善するには、後継者育成を念頭に置いた次世代参加型の企画、活動をしていかなければ、という思いは皆同じようでした。

参加された各機関代表の皆様が、何かしなければの思いを捨てず、進むことを諦めずに始動され広まることを期待します。花が咲き、草木が芽吹く季節に新本苑が完成します。間近です。造り上げるのは昭和世代の人、維持活用は平成・令和世代の人と、引継げますように礎を整えましょう。よろしくお願い致します。参加者は18名でした。

信仰覚書

出口日出麿 著　第五巻（P219）

進歩向上の階段

体から霊へ進まねばならぬ。底から上へ昇らねばならぬ。形から超形に行かねばならぬ。地から天へ至らねばならぬ。最も簡単から、最も複雑へとならねばならぬ。

すべて、この順序、階段を無視しては、とうてい真の向上進歩はあり得ない。

○

統一しているが如くにして、しかも複雑なる自分をよくよく省みるべきであ、味おうべきである、知るべきである。

連載　大本こぼれ話

「三幅前掛け」

特任宣伝使　芝田豊海　出口直日　著

私はずっと以前から、洛北、大原の三幅前掛をしめた百姓姿の美しさを好もしく思っていました。

大本事件が起こって、私も百姓をするようになってから、三幅前掛をしめ始めたのですが、妹たちや娘たちも次第に、その美しさに魅かれて愛用するようになりました。

近ごろ、京都の街を歩いていますと、よく先方から私たちの方に流れてくる視線を感じるのです。それが、相当に教養のある感じの方から眼を凝らし注がれるのでハッとするのですが、その焦点は私たちの愛用している三幅前掛にあることが分り、ホッと安堵するとともに、三幅の美しさに自信をもって来たことに、ひそかな誇りを感じました。

それが最近、三幅前掛は古い伝統と、かぐわしい由来をもっていることを知りました。

今からおよそ七百七十年ほどの昔、平家の一門が滅んだ時、建礼門院も御入水ありしに、心ならずも源氏の武士に救われ、再び都に上られ、元暦二年、わずか御年二十九才にて御出家となり、それより大原の寂光院に篭られています。寂光院の建礼門院の側に、大納言の局ともう一人阿波の内侍が仕えていましたが、この阿波の内侍が三幅前掛を始めた方と伝わっています。

そのころの女官は、すべて緋の袴をつけて仕えていたのを、阿波の内侍が略装として麻の緋の三幅前垂れをつくり、袴に代えたのが始まりで、それは都をはなれた大原の里では、女官とて労働がともない、また、むぐらを別けて都への使いの都度、袴ではとても不自由であったところからと、もう一つは何かといえば、里人の院へ御用に上がることもしげくなったので、その節の礼装にと―袴は上が開いているが、労働しやすいようにと下を開けた―のが〈三幅前掛〉となったのです。